

保育園児における調整・仲直り行動の発達の検討 - 身体接触に注目した保育の日英文化間比較研究 途中経過報告

早稲田大学大学院 広瀬美和

問 題

保育園における調整・仲直り行動について

けんかやいざこざ等、子どもの社会的な葛藤を論じた研究では、これらの社会的葛藤が、子どもの社会性の発達に寄与していることを、近年明らかにしてきている（荻野，1986；斉藤，1992）。特にいざこざについて論じた研究に焦点を当ててみると、子どもがいざこざ場面におかれた際には、自らが持つ社会的スキルを用いながら、いざこざの解決を志向することが明らかになっている（Shantz，1987；Sackin & Thelen，1984）。以上のような知見の含意するところは、子どもの葛藤解決の経験は、子ども自身の社会的スキルの発達の促す要因のひとつであるといえよう。

乳幼児初期の子どもと大人との交渉では、大人側の子どもに対する配慮が働くため、社会的葛藤が生じる場面に子ども自身が直面することはほとんどない。ところが、保育園や幼稚園における子ども同士の関係においては、互いに相手の考えや心情、パーソナリティを理解できないことで社会的葛藤が生じるとともに、このような問題解決もまた経験するといえよう。

しかし保育現場や幼稚園教育現場のような実際の場面では、いざこざへの介入の仕方について未だ十分に明らかにされてはいない。子どもの集団をケアしたり教育したりする現場は、種々の状況や場所、参与者によって相互作用の様相が異なる複雑な場であり、保育士にはそれぞれの文脈に応じた柔軟な対応が求められる。そのため、いざこざへの介入の仕方も多様なものとなるからである。

日英比較をすることについて

また、現在日本では、幼稚園と保育園の総合施設化に向けてモデル事業の実施や法案提出など、整備が進められている。日本では保育所においても、満3歳以上の幼児に対しては、幼稚園教育要領を基本として幼児教育が行なわれている。しかし小学校での教科教育への移行の問題、あるいは保育園に子どもを通わせる親の中にも、幼児教育に対する要望が高まってきたという状況から、就学前教育のあり方が検討されることが求められている。

一方イギリスでは、日本よりも1年早い就学システムの下で教科教育が行なわれている。このことは、日本ではまだ幼児として扱われる時期に、集団での学びの活動がなされると同時に、その前段階では学びの活動への準備がなされるということにもなる。

その就学前児教育は、イギリスではナーサリースクール、ナーサリークラス、レセプションクラスと呼ばれる施設によって担われている。ナーサリースクールでは、クラスに1名の教師と保育士資格を持ったナーサリーアシスタントが配置されており、日本において現在モデル事業として行なわれて

いる幼保園に近い形態をとっているといえよう。

このような状況にある現在、先行文化について知ることは重要であると考えられる。特に、保育園や幼稚園での葛藤解決場面については、社会的スキル訓練の場としての環境の異同を検討することが求められる。

身体接触による調整・仲直り

Morris (1971) や Argyle (1988) は、人間の感覚や人間関係において身体接触が重要であることを指摘している。特に母子間では、母子の相互作用を促し親子関係の絆を形成する上で重要である (Klaus & Kennell, 1982)、あるいは乳幼児期の周囲の人間からの身体接触は自然の鎮静剤の役割を果たす (鈴木, 1995) という指摘もある。そういった身体接触の重要性への着目から、カンガルー・ケアやタッチ・ケアといった母子の発達を促す支援も行なわれている (菅野, 2003)。

また山口 (2004) は、保育園児のなかで、問題行動を起こすとされている子どもに対して、友達同士で手をつないで輪になったり、大人が肩や手によく触れる遊びを取り入れたりするなどの実験を行なっている。その結果、実験を行なった群では有意に望ましくない行動が低減したことを報告している。皮膚レベルの欲求が満たされることで幼少期の子どもの心が穏やかになることを主張しているのである。

また、葛藤の調整や解消に関する研究では、サルや類人猿の集団での和解行動として身体接触が用いられていることが指摘されている。そのなかでは約4割が葛藤後に互いの身体を接触しあっていることが報告されており、キス、抱擁、毛繕い、優位者の口に指を入れるといった身体接触行動が調整の役割を果たしていることが示唆されている (De Waal, 1993)。

幼児の仲間葛藤の平和的で協同的な解決についての行動学的な検討を行った Sackin と Thelen (1984) は次のように報告している。まず、就学前児の間での葛藤の31%が連合的な結果へとつながっていた。その和解的な行動の中には玩具の提供、協同的提案、実質的な謝罪とともに、手をつなぐ、なでる、キスをする、抱擁するといった、友好的あるいは援助的な様式で接触する身体的な接触行動が含まれていた。つまり身体接触は特に社会的な攻撃性を緩和するのに効果があるようだ。

また、身体的な遊びと攻撃とは非常に区別しにくい特性を持っている。しかし、一見第三者からは攻撃と判断されるような激しいやりとりの中で、当事者たちは遊びを成立させている。小山 (2003) によれば、当事者間では身体接触中に交わされる筋肉の緊張と弛緩のなかに遊びを伝える要素があるのだ。身体接触には、個体の気持ちに慰撫的に働くだけでなく、相手の怒りなどを計る側面もあるのかもしれない。

以上のような側面をもつ身体接触到、文化的な環境が異なることによってどのような様相が表れるのかを検討することで、子どもにどのような環境を整えてやるべきなのかについて、判断の一助となるような情報が与えられるだろう。

目 的

以上のような関心から、比較研究により日本の保育園における葛藤解決の特徴を可視化することを目的とする。本研究においては、特に身体接触的な働きかけをとともなう葛藤解決の側面に注目して検討する。

方 法

デジタルビデオカメラを用いた自然観察的方法による。

観察対象と観察期間：

- ・ 埼玉県内の私立保育園に通園する 3～5 歳児クラスの園児（2005 年 6 月～2005 年 10 月）
- ・ Edinburgh 市内の A Nursery School に通園する 3～5 歳の合同クラスの園児（2005 年 8 月 19 日～8 月 24 日）

観察手続き：午睡後から降園までの場面をビデオで記録した。対象クラス内で 2 名以上の集団を形成している子どもの相互交渉を中心に、いざこざの発生から終結までの記録を行なった。原則として同一児の観察は 1 回あたり 20 分程度とするが、いざこざを記録している状況では、一連のいざこざ収束を対象児変更の基準とした。

分析手順：収集されたエピソードデータは、ビデオデータ質的分析支援ソフト mivurix（荒川，2002）を用いて分析を行った。mivurix による分析の手順は以下のとおりである。まず、対象とするエピソードを、デジタル化してコンピュータ内に蓄積した。その上で、デジタル化された映像について「カットアップ」と呼ばれる、タグ付けを行った。この作業を行なうことで、グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Glaser & Strauss, 1967/1996）における「情報の断片化」と同様の処理が行なわれたことになる。次に切り取った映像に仮の名前をつけた。この作業は KJ 法でいうところの「最初の見出し」と同様の位置づけとなる（荒川，2005）。さらに、タグ付けした映像を繰り返し視聴して分類をした。

分析途中経過

mivurix による映像分析から、日本の保育園での葛藤解決場面での身体接触到については Table1 に示すようなカテゴリが生成された。このカテゴリを参考に、Edinburgh 市の Nursery School で観察された身体接触行動についても検討を進める予定である。

ただし、筆者が Edinburgh 市のナーサリー・スクール 2 園での観察から得られた映像データを基に、KJ 法によって保育環境を整理したところ、文化的な要因として考えられる要素は、Figure1 のようになった。泣いたりぐずったりする子どもに対しては、抱きかかえたり、撫でたりするなど、慰撫的な身体接触到を施しており、身体接触到について特に制限する様子は見られない。しかし、幼児同士の相互交渉に対しては、ナーサリー・ティーチャーの目の届く範囲で発生したいざこざ場面において、ナー

サリー・ティーチャーが、一方の手を引いて連れて行くなど、当事者同士を物理的に引き離す介入方法をとっている。また、ナーサリー・ティーチャーは常に多くの子どもの状況を見渡せるような場所におり、トラブルには即座に介入できるように位置取りしている。そのため、目の届く範囲内では身体的な相互交渉が続きにくい環境にあると考えられる。しかし、ナーサリー・ティーチャーの死角で発生したいざござでは、砂をかけたり、身体を押し合ったりといった激しいやり取りも観察されている。一方で、幼児同士が他児のトラブルに対して「kiss, (子どもの名前).」と促すなど、日本には見られない方略も見られた。以上のように、保育の体制において両園で異なっており、分析をさらに進め、Edinburgh市のナーサリー・スクールのデータからのカテゴリを整理しなおして比較すること現在検討中である。

Table1 身体接触の種類

機能	行動
(葛藤管理)	涙を拭く
慰撫	撫でる
(計る・読み取る)	肩に手を置く・肩を抱く
	手を引く(誘導)
確認	手をつなぐ
遊び	身体遊び 物の共有

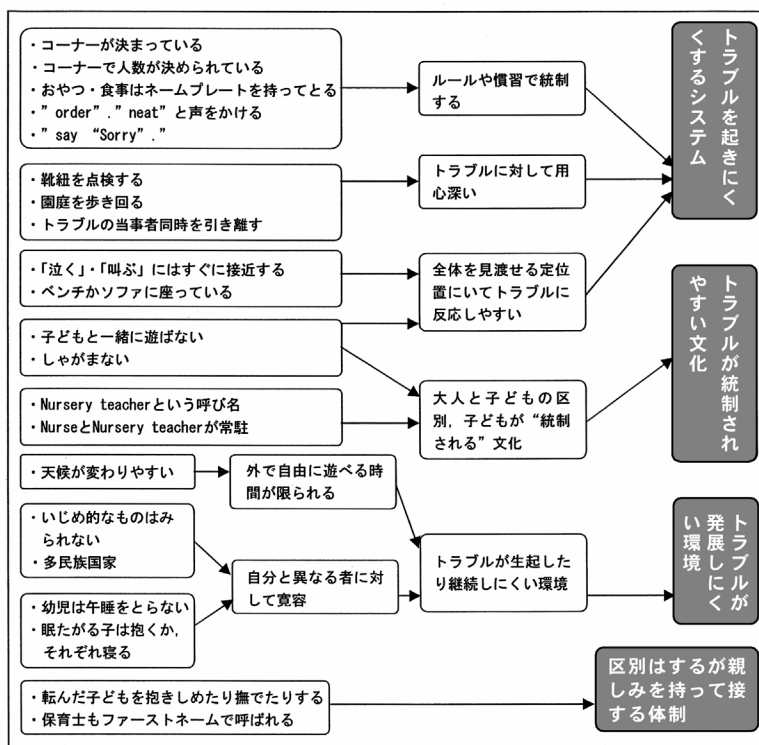


Figure1 文化的要因カテゴリの生成過程

文 献

- 荒川歩 . 2002 . Mivurix. <http://www.k2dion.ne.jp/~kokoro/mivurix/> (情報取得 2003/5/3).
- 荒川歩 . 2005 . 映像データの質的分析の可能性 , 質的心理学研究 , 4 , 66-74.
- Argyle, M. (1988). Bodily Communication (2nd ed.). London : Methuen.
- De Waal , F.B.M. (1993). 仲直り戦術 ; 霊長類は平和な暮らしをどのように実現しているか . (西田利貞・榎本知郎 , 訳) 東京 : どうぶつ社 (De Waal , F.B.M.(1989). Peacemaking among primates. London : Penguin Books.).
- Glaser, B.G.& Strauss, A.L. 1996 . データ対話型理論の発見 : 調査からいかに理論をうみだすか (後藤隆・大出春江・水野節夫 , 訳). 東京 : 新曜社 . (Glaser, B.G. & Strauss, A.L. 1967 . The discovery of grounded theory : strategies for qualitative research. (Chicago : Aldin.).
- Klaus, M.H.& Kennel, K.H. (1982). Parent infant bonding , 竹内徹・柏木哲夫・横尾京子 (訳) , 親と子のきずな 東京 : 医学書院 .
- 小川高正 . (2003). 遊び・ケンカ . 根ヶ山光一 , 川野健治 (編著) 身体から発達を問う : 衣食住のなかのからだところ (pp218-220). 東京 : 新曜社 .
- Morris, D. (1971). Intimate behavior. Jonathan Cape Ltd. 石川弘義 (訳) , ふれあい 愛のコミュニケーション . 東京 : 平凡社 .
- 荻野美佐子 . 1986 . 低年齢児集団保育における子ども間関係の形成 . 無藤隆・内田伸子・斉藤こずゑ (編) , 子ども時代を豊かに (pp. 18 - 58). 東京 : 学文社 .
- 斉藤こずゑ . 1992 . 仲間・友人関係 . 木下芳子 (編) , 新・児童心理学講座 8 : 対人関係と社会性の発達 (pp. 29-82). 東京 : 金子書房 .
- Sackin, S., & Thelen, E. (1984). An Ethological study of peaceful associative outcomes to conflict in preschool children. Child Development, 55, 1098-1102.
- Shantz, G.U. (1987). Conflict between children. Child Development, 58, 283-305.
- Smith, P.K. (1997). Play fighting and real fighting : Perspectives on their relationship. In : A Schmitt et al (Eds.) . *New Aspects of Human Ethology*. New York Plenum Press.
- 菅野幸恵 . (2003). 触れる・離れる . 根ヶ山光一 , 川野健治 (編著) 身体から発達を問う : 衣食住のなかのからだところ (pp141-154). 東京 : 新曜社 .
- 鈴木晶夫 . (1995). 身体と子別れ . 根ヶ山光一 , 鈴木晶夫 (編著) , 子別れの心理学 東京 : 福村出版 .
- 山口創 . (2003). 乳児期における母子の身体接触が将来の攻撃性に及ぼす影響 . 健康心理学研究 . 16 , (2)60-67 .
- 山口創 . (2004). 子どもの「脳」は肌にある . 東京 : 光文社 .

< 付 記 >

本研究は早稲田大学人間科学学術院根ヶ山光一教授，Edinburgh 大学 Niki Powers 氏，早稲田大学人間総合研究センター河原紀子氏との日英の保育に関する共同研究プロジェクトの一環として行なわれたものであり，現在も日英両国についての調査とデータの蓄積が進められている。